SITES II
HERSETEC
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration SITES II
Nagoya University, Graduate School of Letters. Global COE Program

GCOE NEWSLETTER

国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

テクスト布置の解釈学的研究と教育

2009.1
No.4

CONTENTS

海外派遣大学院生調査報告 …… 02
グローバルCOE論文賞 …… 03
教育プログラム　2008年度講義科目の紹介 …… 03
研究活動　グローバルCOE講演会 …… 11
オープン・レクチャー …… 12
グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 14
海外出張報告 …… 15
Report & Information …… 16

2008年度 海外派遣大学院生調査報告 第1回

U. C. バークレー校三井文庫旧蔵本の研究 アメリカ

玉田沙織●文学研究科 日本文学 博士後期課程3年

2008年7月31日から9月1日の約1ヶ月間、アメリカ合衆国カリフォルニア州に滞在し、三井財閥旧蔵本の調査を行った。複数のコレクションより成る旧三井文庫の蔵書数は、版本・写本を合わせて10万冊にも上り、米国国内諸機関の中でも有数の規模を誇る。今回の派遣調査は、このうちの本居文庫旧蔵コレクションの歌書を中心に行ったものである。調査の最大の目的は、国学者の書入を持つ『後撰和歌集』版本の再調査（2006年に第1回調査済）にあり、加えて、該本を生んだ学問的基盤を明らかにすべく、文庫内の間テクスト・メタテクストを拾い出すことをも目指した。

書入本は、江戸後期に三河吉田（現豊橋）の地で成った『後撰和歌集』の注釈書『後撰和歌集新抄』の前テクストにあたる。著者・中山美石のある段階での解釈を師の本居大平（宣長養嗣子）が添削したものであり、版面の上下欄、行間への直接的な書入に加え、天地（上下端）に付された貼紙にも書入を持つ。『後撰和歌集』享受の一例として重要なばかりでなく、江戸後期国学門におけるテクストの生成を動態として捉えるに格好のテクストと言える。

調査では彫工への指示を伴った注釈書草稿も見つかり、本居大平家の家学の形成過程を示す資料も多数目にした。また、図書館の御厚意により公刊資料に基づく手元データを補訂する機会を得た。今後は、撮影資料を元に『新抄』成立過程の究明に努め、併せて江戸後期歌学テクストの布置構造を考える一助としたい。

Last but not least, I would like to thank the East Asian Library for admitting my long-term research, at the same time providing such a comfortable environment.

* Picture of books: Courtesy of the C. V. Starr East Asian Library University of California, Berkeley.

祭りファーローを取り巻くさまざまなテクストの調査研究 ネパール

森田剛光●文学研究科 文化人類学 博士後期課程3年

2008年8月から約2ヶ月間、主に西北ネパール、カリガンダキ渓谷地域、タッコーラ地方に滞在し、商業民族タカリーの祭りファーローの研究調査を行った。ファーローは、起源伝承の再現と土地の女神との結びつきを確認する各種儀礼で構成され、チベット、インド両文明圏の境域を故郷とするタカリーの民族形成に重要な役割を果たしてきた。しかし近年、移住地域の拡大とタカリー語話者の減少、成員の高齢化が進み継続が危うい。各儀礼のもつ意味、正確な手順は、ラマ僧父子二人のみに継承されているにすぎない。今回、ラマ僧父子の依頼を受け、ファーローに関する古文書、教典の撮影を行った。加えて、過去2年間に撮りためた写真、DVDを見てもらい、儀礼の変化を検証した。本年の祭りの開催中は、各儀礼をHDVカメラで撮影することに専念した。また譲り受けたファーローに関する古い歌の覚え書きをデジタルデータ化した。撮影した写真は全日程で3000枚を超え、ビデオは15本を数える。今後は、古文書、教典などの文書テクストの翻訳を進めつつ、映像テクストを通して、儀礼テクスト空間の比較検討を行い、タカリーの宗教的、儀礼的体系を明らかにし、祭りファーローに関するテクスト布置構造の全貌を考察していきたい。

Global COE
グローバルCOE論文賞
2008年度第1回

文学研究科グローバル COE プログラムでは、博士後期課程に在籍する大学院生の優れた論文を「グローバル COE 論文賞」として顕彰し、プログラムの研究論集『HERSETEC』に掲載します。2008年度第1回の募集は9月8日に締め切られ、多くの応募の中から以下の論文が採択されました。「グローバル COE 論文賞」に応募するためには、グローバル COE 授業科目「テクスト布置解釈学原論」または「テクスト布置解釈学各論」を受講していることが必要となります。

深津周太（博士後期課程１年）

狂言テクストにおける感動詞「シシ申」の歴史的研究

【講評】 今回応募があった論文はいずれも水準の高い力作が揃っているとの認識を得たが、慎重な検討の結果、論文賞として深津周太氏の「狂言テクストにおける感動詞「シシ申」の歴史的研究」（日本語学）を選考した。その経過と理由について以下報告する。

深津氏の論文は、中世後期の日本語感動詞「シシ申」が「ナウナウ」「申々」とともに「初対面の相手への挨拶的呼びかけ」として機能の差異を保ちつつ共存しながら形態音韻論的要因によって内部的再編成が行われたことを、異なった時期に成立した二群の狂言テクストを分析することによって論証したものである。従来、感動詞はその性格上品詞分類における「継子」扱いされ、個別的な観察対象ではあっても構文構造と関連して考察されることがなかった。深津氏の論文は、この点に切り込んだもので感動詞の歴史的成立と編成過程を構文構造の観点から捉えるという従来に無い視点が高く評価された。いちいちの用例に対する読みも深く、考証が丹念である。

以上が深津氏の受賞理由であるが、最後に応募論文全体を通してみた印象を述べれば、より高度な外国語表現力を身につけて、多様な事実の中から簡潔にして本質的な認識を導く鋭い直観力を養成することが大いなる飛躍につながると期待される。

釘貫 亨（グローバル COE 教育担当サブリーダー）

講義科目の紹介

グローバル COE プログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」では、「テクスト布置解釈学原論」と「テクスト布置解釈学各論 I ～ VII」を開講し、2008年度博士後期課程入学者から各2単位の修得を義務化しています。ここでは前期に開講した授業を中心に、内容をまとめて紹介しています。また、グローバル COE プログラム授業科目の履修は、「グローバル COE 論文賞」および「大学院学生海外派遣制度」に応募する際の条件となっています。

テクスト布置解釈学原論［前期］

2008年6月10日㈫・17日㈫

“テクスト布置”からみる日本語文末形式の諸用法

宮地朝子 准教授（日本語学）

6月10日㈫

「表現」する――語り、書くとき、私達が用いる日本語は非常に多様である。書物・文献内の文字によって記録された用例は言語研究のデータとしても重要であり、ジャンルや文体、地の文・会話文といった位相を区別しながら活用されてきた。ただし歴史的な文献における「文体」や「ジャンル」は、あくまで「文法」の外側の「位相」として把握されていた。一方で、テクストとしての「日本語」の多様性は、そのような位相差――より一般化した形での「文字／地の文なら「書き言葉」、セリフなら「話し言葉」」と

いった分類では捉えられず、場合によっては程度差でしか捉えられないような連続的かつ横断的・相互交渉的な様相を持つ。文体・ジャンルによって各々の言語形式が「固い」「古い」あるいは「新しい」「談話的」などといった諸用法を持つことも指摘されている。興味深いことにこの言語形式の連続的な多様性や文体――時と場合――による意味用法の違いを、母語話者は無意識に使い分けている。言文一致を経て文体間の横断・相互交渉がしやすくなった近代以降の日本語においてはますますその性質が顕著になっている。とすれば、言語形式の意味用法は、個別の形式の持つ本質的意味とテクストのタイプや文体／ジャンル的差違に重なる伝達場面の構造的差違の組み合わせによって発現するものと考えることができるのではないか。

6月17日㈫

そこで本講義では日本語の文体的多様性を“テクスト布置”のバリエーションとして見ながら人間の言語運用における操作性と組み合わせて整理し文法的説明に組み入れることを提案した。文体的差違、すなわちテクストの多様性を生み出すのは話手の身体性の強弱と、話手・聞手の共在性・非共在性として整理できる伝達場面のタイプであると仮説する。〈共在〉とは対面対話のように個別具体・特定的な話手と聞手との伝達場面であり、相対する極としての〈非共在〉とは文字媒体のマスメディアや論文のように、話手の個別的身体性が可能な限り捨象され特定の聞手もいない（または抽象・多数）という特徴を持つ。この場面の差を前提とした話手の操作が、言語形式の多様な用法の発現に関わっている。例えば文末詞「です・ます」は、聞手との距離を示す「丁寧語」の用法は、具体的な話手・聞手のいるテクストにおいてのみ発現する。論理的な文章や文字媒体のマスメディアといったテクストにおいては「やさしい」「わかりやすい」といった、敬語としての距離の表示とは相反する用法が発現する。これは〈共在〉で距離の表示が「遠」となる一方、〈非共在〉においては「です・ます」の使用が聞手を顕在化・特定化することにより関係を作り出す効果が生じるためと説明できる。このような説明は、語用論的条件を組み込んだ文法的説明の一つであり、また言語変化を根拠づける観点をも提供する。

2008年6月12日㈭ 5限

歴史テクストの伝来と滅失

加納 修 准教授（西洋史学）

今日まで伝わる史料は、実際に作られたはずの史料の一部でしかないばかりか、史料の性格に規定された形で過去の現実を反映し、ときに歪曲する。残っている史料から復元される歴史像は部分的であるだけでなく、しばしば偏りを含んでいるのである。歴史の客観性を担保するためにも、失われた部分を考慮する必要があろう。だが、失われた部分はどのようにして知ることができるのであろうか。史料の伝来状況の検討は、いかなる史料が失われやすいかについて、若干の示唆を与えてくれる。

授業においては、西洋中世の証書史料に限定し、証書伝来の一般的特徴を概観したあと、さらに対象を絞って、メロヴィング朝の国王証書の伝来状況を検討した。

大半の証書は教会の文書庫を通じて伝わっており、永続的な法効力を有するがゆえに保管された。このため俗人の財産や権利に関わる証書や、一時的な法効力しか持たない文書は、そのほとんどが失われた。また、裁判に関して言えば、教会側が勝利した訴訟の記録の伝来可能性の高さとは対照的に、俗人が勝訴した裁判や、俗人間の裁判の記録はほとんど伝わらない。伝来する証書史料は、西洋中世を現実以上に「農村的」で「教会中心的」な世界として、われわれに押しつけるのである。

メロヴィング朝の国王証書については、一般に贈与やイムニテートなどの特権状がその代表的な種類とみなされてきたが、伝来状況の検討によって、むしろ裁判文書や私法行為確認文書こそが最も数多く作成された可能性があることが明らかになった。

2008年6月12日㈭ 6限

史料類型論の可能性

加納 修 准教授（西洋史学）

「史料類型」というのは、共通の特徴によって一つにまとめられる史料のグループをさす。史料の類型区分は基本的に、われわれ歴史家の認識の所産であり、恣意性や近代的観念の呪縛から完全に自由ではあり得ない。たとえば、

西洋中世の証書史料を「公文書」と「私文書」に分ける際には、常に困難がつきまとう。伝統的に、王や教皇が発給主体となる文書を「公文書」とし、それ以外を「私文書」とする区分が通用してきたが、地方役人の発給した文書は「私文書」なのだろうか。それだけではない。たとえば国王裁判の記録のように、もともと王の名前で発給されていた文書がある時点から「私文書」の形式で作成されるようになるケースも知られる。この事例は、ある現象を文字化する枠組み（類型）が時代の流れの中で変化した事実を示す。同一と見られるような現象を文字化する際の形式が変化することは、それまである類型の枠組みで文字化されていた現象が、別の類型の中で文字化されるようになることを意味する。それゆえ、同時代の文書類型認識は、いくつかの類型の間に存する関係の変化でもあり、この後者の問題についての考察を導くことになる。史料類型論の可能性の一つは、同時代の認識の解明にあり、こうした研究は、上で挙げた事例について言えば、西洋中世における「公観念」の独自性を明らかにするのに役立つであろう。

同じく、証書を法文書という性格規定から解放し、コミュニケーションの媒体としてその言語的・図像的特徴を検討する記号論的な研究も、同時代の証書認識に近づくのに有効な方法である。

2008年6月16日㊊・23日㊊

生成論と前＝テクスト

鎌田隆行 講師（フランス文学）

本講義では2回にわたって生成論の成立とその理論的・批評的射程、また解釈学との関係について概説を行った。

フランスで1970年代に理論化された生成論は、文学作品の生成資料を扱う点では一見したところ従来の文献学的な文学研究と対象を同じくするように見えるかもしれないが、作者の意図を十全に実現した「単一の」テクストの確定を目的とする後者とは異なり、絶えざる生成変化を続ける「プロセスとしての文学」（A. グレジヨン）を志向し、複数的で可変的な作品概念に基礎付けられている。

例えば近代以降の文学作品に関して我々が今日読解を行う版本は、一般的に作者生前の最終版に準拠した校訂版であるが、このような「最終版」に先立つ一連の制作・出版過程で生じた書記物（メモ書き、プラン、シナリオ、草稿、校正刷り、初版、再版本等）を「前＝テクスト」として捉え、作品の諸要素と全体構造の誕生とその変容を分析することで作者の文学的想像力の展開を検証し、また作品の意味作用の新たな可能性を探ることが生成論の主たる目的である。

他方、生成論は作品の制作をその問いの中心に据えつつも、解釈や受容という問題と無縁でないどころか、本質的なつながりを持っていることにも留意する必要がある（グローバル COE 第２回国際研究集会プロシーディング参照）。まず、作品の生成のダイナミズムを跡付ける前＝テクストとは決して所与のものではなく、分析者が時にカオス的ですらある資料群から構築していくものであり、一つの解釈、というかむしろ複数の解釈行為の所産である。さらに、作者にとっても草稿や校正刷りで推敲を繰り返し、作品の美学性や思想的文体的完成度を高めていくことは、生成しつつある作品の新たな意味作用の可能性を自ら現動化していくことに他ならず、（再）解釈行為のダイナミズムがかかる創造の運動を惹起し続けているのである。

2008年6月26日㊍・7月17日㊍

インドネシア都市部における人種の記号論

ゼーン・ゴーベル 准教授（西洋史学）

6月26日㊍

この論文では、エスノメソドロジーとパースの記号論の言語人類学的解釈（例えば Wortham 2006, Agha 2003, 2007）に依拠し、インドネシア・スマランの2つの地区集会における社会的同定の過程を検討する。これらの録音は、スマランの政府の後援による住宅団地（PERUNAS）のある地区において、1996年中盤から1997年初頭にかけてなされたものである。筆者はまず、より広く行き渡っている社会歴史的観念――もっと正確に言えば、「記号的レジスター」（Agha 2007参照）――を指摘する。その記号のカテゴリーには、中国人としての社会的役割、財産、社会的責務が含まれる（Suryadinata 2004、また、例えば Hoon 2006, Purdey 2006）。このようなカテゴリーは「会話的ナラティヴ」（例えば Georgakopoulou 2007, Ochs and Capps

2001）において隣人を社会的に同定するために用いられるが、筆者はWorthamの研究に依拠して、これらのカテゴリーはやりとりをする時間や状況を通して修正を受けると主張する。例えば筆者は、これらのカテゴリーが地域的同定のカテゴリーと基準、例えば地区男性集会における「定例地区集会の出席者」や「地区税納税者」、「けちな隣人」、「親切な隣人」等を指標付け、作り出すと同時に、いかに変化するかを示す。その中で、同一性と差異の談話についての研究への言及も行い、これらの社会的同定過程を理解する（例えばIrvine 2001, Irvine and Gal 2000, Billing 1999, Bucholtz and Hall 2004, Barth 1969）。

7月17日㈭

この論文は、最近のおよび進行中の、インドネシア都市部における移住者群・言語使用・同一性に関する研究（Goebel 2008, 2007. In press, 2008）に基づくものである。そこでは、エスノメソドロジーとパースの記号論の言語人類学的解釈に依拠し、同定カテゴリー――例えば民族性――が、インドネシアにおける言語の使用および使用者とどのように結び付いているかを探究する。筆者は、そのような一見自然なカテゴリーの再産出が、カテゴリーの微妙な変化とともに、記号論的レジスター、その形成、および社会的同定過程によって（例えばScollon and Wong Scollon 2003, Wortham 2006, Goodwin 2000, Agha 2003）理解できることを示唆する。とりわけ強調するのは、この過程の一側面、つまり言語使用の公的表現が、言語使用を個性と関係の使用可能な社会的カテゴリーに結びつける記号論的レジスターを定式化する方法である。筆者は、3種類の公的であり、それゆえに公認された発話事象、すなわち学校教育、国勢調査、テレビ放送を検討する。特に興味深いのは、3つの連続テレビ番組からの抜粋によって例証される3つの表現パターンである。第1のパターンは、はるか以前、植民地時代の慣行の中で確立され、言語使用の3つの公的表現のいずれにも見られる言語と民族性の結び付きである。第2のパターンは主として、第1のパターンの一部として作り出された新たな言語変化のいくつか、つまり民族的他者の指標としてのインドネシア人の表現に関係するものである。第3の表現パターンは、言語と民族性の結び付きが相互に適合する過程を経て変質するという、ある種の競合的な観念に類似している。このような表現の多重様態分析を行う際に、筆者は、言語形式・空間・外観・人工物・韻律・休止、話題等の記号が、新たな記号論的レジスター（SR）の形成過程の一部としていかにして互いに指標付けられるのかを指摘する。したがって、記号のカテゴリー――すなわち記号論的レジスター――にある記号は「同一性の表象」として、特定の状況下でのやりとりとやりとりの未来の表現において意味を作り出すために潜在的に利用可能である（Agha 2007参照）。

2008年7月3日㈭・7月10日㈭

17世紀・18世紀の解釈論

クレール・フォヴェルグ 外国人教師（フランス文学）

17世紀にはベーコンとホッブス、さらにライプニッツのような著者は、論理学が不要となる分野において解釈の知識の重要性を問題にする。そこでベーコンは、「自然の解釈」という観念を述べて、被造物に印刻されている神の悟性の観念を解釈するのに一番良い方法は、現実を実験によって経験することだと示す。解釈は論理学のように知的な作用に係わることなく、むしろ実験によって自然と技術のそれぞれの作用に係わるのである。一方ホッブスは、聖書の解釈が哲学的な真実を望むことなく、言葉の意味に留めておけば良いと断言する。ところで、解釈の根拠となる理性の要求は聖書と自然の法則との一致を前提とする。

ライプニッツによって、解釈の知識の重要性が明らかになる。それは「類似の知識」に属している。可能性しか検討しない普通の論理学と異なって、解釈は「真実らしさの論理」または「本当らしさ」の論理によって行われる。その結果、解釈が神秘的教義にも自然の真実にも係わっていて、神秘的教義も自然の真実も信じるものであって、理解されなくても意味を成すという特徴を示しており、さらに「適切な」観念の要求の仕様がないので、ただ説明される特徴を示す。

以上のコンテクストにおいて、解釈の観念が『百科全書』と『自然の解釈に関する思索』をはじめとしてディドロのテクストに述べられている。明白であるベーコンの参照のほかに、ディドロはライプニッツに通じていて、知識は記号の結合であり、その結合は自然が組み合わせている存在と性質と、または現象と現象の連結とある程度の類似があると考え、さらにその類似の説明は解釈によるものと考えている。

『百科全書』において、解釈の方法は自然を構成する存在にも、その存在の性質と表象にも、観念と表現にも応用

されて、さらに知識の体系とそれぞれの体系の関連に応用される。ディドロに執筆された哲学の歴史の項目に実施される『百科全書』による体系の解釈は、知識の体系を思考の自然の形に帰することにある。したがって、科学と技術の進歩が正しく再評価される。

2008年7月4日㊎

テクストの類型

町田 健 教授(言語学)

言語テクストを構成する基本単位は文であり、文は事態を表示する。したがって、テクスト全体が表示する内容とは、構成要素としての事態の統合体である。文が表示する事態を形式化する方法と同様の方法で、テクストの内容を形式化することは、テクスト分析の重要な目標となる。事態は、文を構成する形態素の意味を、文の構造に関する情報を用いて統合する過程を経て得られるから、テクストの内容を導出するためにも、テクストの構造を明示化する必要がある。テクストの構造は、文の構造に比して複雑であることは明らかなので、テクストに関する構造規則を求めるための方策として、テクストの類型化を試みることができる。

事態全体の特性に関わる要素として、1. 成立時区間、2. 全体性、3. 成立可能性があるが、テクストの類型化に際して考慮すべき要素は、事態の時間的特性に関与する成立時区間と全体性である。この観点からテクストを分類すると、テクスト中で一次元的に配列された事態の成立時区間がそれぞれ異なるものと、任意の時区間において成立する事態によって構成されるものとの2種類が区分されることが分かる。前者は、小説や歴史書のような、主として述語に過去時制が適用される文により構成されるテクストであり、これを「物語テクスト」と称する。後者は、論説文や法令など、主として述語に現在時制が適用される文により構成されるテクストであり、これを「論理テクスト」と称する。さらに、これら2種類のテクストが混合した、随想に類するテクストもあり、これを「混合テクスト」と称する。このようにして設定されたテクストの3類型について、それぞれの構造を形成する規則を抽出することが、テクスト分析の課題となる。

2008年7月11日㊎

テクストの構造

町田 健 教授(言語学)

言語テクストの構造を抽出するための基礎となるテクスト類型として、「物語テクスト」「論理テクスト」「混合テクスト」の3種が設定される。混合テクストは前2者の混合体であるから、テクストの構造を形式化するためにまず考慮すべきは、物語テクストと論理テクストの構造である。

物語テクストを構成する事態の成立時区間を ti とし、この時区間において成立する事態を ei<ti> で表示することにすると、最も基本的な物語テクストの構造は、[e1<t1>, e2<t2> … en<tn>: t1<t2< … <tn]（ただし、ti<tj は、時区間 ti が時区間 tj に先行することを意味する）によって与えられる。しかしながら、テクスト中に事態の部分を表示する部分相形式が表れている時には、構造はやや複雑になり、次のように表示される。

[e1<t1>, es<t2> … <ek<tk>< … <en<tn>: t1<t2< … <tk-1⊆ ek<tk+1< … <tn]。

論理テクストは、論理的な関係によって結合される一連の事態群と、これらの事態群から帰結として導出される事態を一つの単位とし、この単位が複数連続した結果、さらに全体的帰結として導出される事態によって構成される。形式化すると、次のようになる。

[E1=[[e11, e12 … e1n] → r1] & E2=[[e21, e22 … e2n] → r2 & … & En=[[en1, en2 … enn] → rn]] → R]。

このように形式化されたテクストの構造に基づいて、一次元的に配列された事態を統合することにより、テクストの内容が導出される。

テクスト布置解釈学原論［後期］

●ジャック・ダララン 招聘教授（元テクスト史研究所（IRHT）所長／フランス国立科学研究センター主任研究員）

第１講義●2008年11月12日㈫

グレゴリウス改革期におけるローベル・ダルブリッセルと修道女の生活

アルブリッセルのロベール（c.1045–1116）は、グレゴリウス改革期のフランスを代表する隠修士である。教皇からの裁可を得て、1101年にフォントヴロー修道院を創設したロベールについては、従来の修道霊性研究で十分な注意が払われてこなかった。しかしながら、同時代の関連文書を博捜し、この隠者に関する基本的情報とその理念を同時代のコンテクストの中に位置づけたのが、『不可能な聖性。アルブリッセルのロベールの見出された生涯』（1985）であった。その著者が、講演者ジャック・ダララン氏その人である。したがって、この日の講演は、彼の研究の出発点であり、そして最も得意とするテーマを下敷きとしている。

ロベール自身は必ずしも大部の著作を残しているわけではない。それゆえ、彼がグレゴリウス改革という西洋中世にとっての転換点（ただしフランスにとっては、グレゴリウス改革よりも紀元千年変動のほうが大きな問題である）というコンテクストの中で、どのような思想を育みそれを実践したのかを知るためには、彼について述べた他の人物の著作によらざるを得ない。ダララン氏は、ブルゲイユのボドリ、レンヌのマルボド、ヴァンドームのジョフロワ、フォントヴローのアンドルーといった同時代人たちの、ロベールに対する評価を丹念に追いながら、修道生活に女性をとりこみ、会則を練り上げたロベールの人物像を、パズルのピースを一枚一枚はめ込むような丁寧なやり方で再現した。

他方で今回の連続講義は、歴史家がナマのテクストからどのような情報を引き出すかという点に重心が置かれている。ダララン氏はパワーポイントに写本を映し出しながら、写本に描かれている挿絵の図像学的解釈に加えて、写本を綴じるための穴、字を揃えるための罫線、欄外の書き込みといった、古書冊学の基礎的作業を丁寧に説明してくれた。教育者としての配慮も行き届いており、出席者に朗読や質問を課す双方向的なやりとりのなかで、テクスト論的な理解を身に付けさせようとしていた。

第2講義●2008年11月13日㈭

アベラールとエロイーズ往復書簡についての考察

畠中尚志の訳で岩波文庫に納められているアベラールとエロイーズの往復書簡は、中世の恋愛風景を伝えるテクストとして、誰もが知る名品である。しかしながら、この書簡の真偽性をめぐっては、近年激しい論争が学者たちの中でたたかわされてきた。とりわけ1972年にジョン・ベントンが、往復書簡は13世紀後半の偽文書であるとの見解を提起して以来、文献学者らは往復書簡を記録する写本の成立過程にまでさかのぼることを余儀なくされた。その議論はすでに、かつてのように文学者や歴史家だけの領域にはおさまらない様相を呈している。

ダララン氏は、真贋問題からはいったん離れ、往復書簡が収められる『トロワ市立図書館802番』の成立について考察を深めた。この写本は往復書簡の成立にとって決定的な意味を持つ写本でありながら、正確な成立年代が確定していない。先日の講義に引き続き、写本になじみのない受講者の多くが十分に理解できるように、イニシャルや色文字といった西洋の写本に特徴的な要素とその機能について解説しながら、古書体学者がどのように写本を解読するのかを示してくれた。

以上のような写本研究の基礎的な知識を整理したうえで、ダララン氏はいくつかの問いを立て、他の研究者や自身による成果を巧みに引用しながら、その問いに対する仮説を提示した。とりわけ、1237年にル・パラクレ女子修道院長エルメンガルドが、3人の司祭と4人の修道女を連れてフォントヴロー修道院に赴くという、一見すると特別の意味を見出しがたい歴史事実が、写本の成立にとって持つ深い意味を論じる様は、『薔薇の名前』もかくやというほどの知的スリルを感じさせた。古書冊学、古文書学、歴史学の先端をゆく論者たちの説を巧みに利用しながら、『トロワ市立図書館802番』の成立を、1237年という特定の年代に落とし込んで行くダララン氏のその手腕と学問の醍醐味に、講義室の誰もが興奮したひとときであった。

第3講義●2008年11月17日(月)

アッシジの聖フランチェスコの自筆にもとづく母性統治についての考察

アッシジのフランチェスコ（1181–1226）は、西洋中世宗教史上最大の人物といっても過言ではない。それにもかかわらず、驚くべきことに日本においては十分な研究蓄積がない。現段階では、キアラ・フルゴーニ（三森のぞみ訳）『アッシジのフランチェスコ　ひとりの人間の生涯』（白水社、2004）が、ほとんど唯一の依拠すべき文献である。ダララン氏の本日の講義は、この想像を絶する彼我の落差を埋める稀有な機会であった。というのもダララン氏は、フランチェスコ研究の世界的権威だからである。

宗教的権威にありがちではあるが、フランチェスコ研究の困難さは、彼自身がほとんど何も書き残していないことにある。わずか2編の自筆原稿が伝わるのみであり、いずれも一見稚拙できわめて短い。本講義では、そうした自筆原稿の一方である修道士レオに宛てた書簡を題材とし、近年古書体学者バルトリ・ランジェリらによって提示された新しい読み方とその解釈について論じた。とりわけダララン氏は、書簡に見える「母のように sicut mater」という表現に注目し、キャロライン・バイナムのようなジェンダー研究者の成果にも言及しながら、この文言の解釈を中心に解説し、さらには古文書学的分析から近代へとつながる「自己の内面化」という問題にまで話を広げた。毎年出講しているボナヴェントゥラ大学のセミナーで弟子たちとともに解明した最新の成果であり、アルブリッセルのロベール研究以来、修道生活における女性や「女性的なるもの」に注意を払ってきたダララン氏ならではの観点からの解読であった。写本に向き合い、たった一つの文字、単語、文章、句読点をもゆるがせにしない解読作法は、テクスト研究の鑑ともいうべき態度であった。

当日は大会議室のプロジェクターに不具合があった。そのため開始が30分ほど遅れたが、それを感じさせないほどの熱気ある講義であった。

第4講義●2008年11月18日(火)

ウンブリア伝説：アッシジの聖フランチェスコ新伝説

先日の講義でみたように、フランチェスコ自身による証言はほとんど伝来していない。したがって、彼の実像を再現するためには、チェラーノのトマスによる『伝記』のような、フランチェスコの間近に侍していた人物による証言テクストに依拠することが必要となる。しかし、それぞれのテクストは、それぞれ情報ソースも異なり、また近代の校訂に至るまでに伝来する過程でテクスト上のズレも出てきているため、すべてのテクストをつき合わせただけでは「フランチェスコとは誰か」を理解することは困難である。それは、四福音書にみえるイエス・キリスト像に齟齬があるのと同様である。

本日の主題は、歴史史料の「オリジナルとは何か」ということである。中世のテクストに関して、通常は唯一つのオリジナル写本が伝来しているわけではなく、そのオリジナル写本を書写した後世の異本が複数伝来している。写本校訂の基本原則であるラッハマン原則に従えば、複数ある異本を比較し、相対的に頻度の高いことばを拾うことによって、最も蓋然性の高いオリジナル写本を再現することが可能となる。しかしながら、異本とはそれ自体で一つの体系を持ったテクストであり、そこに見られるオリジナル写本との差異とは、必ずしも単なる書き損じではない。写本系統図を作成し、オリジナル原本を再現することは必要であるが、異本にはそれぞれ独自の生命があり、それ自体として解釈すべき情報を提供する。アッシジの周囲に広がるウンブリア地方に散在するフランチェスコ言説の網をかき分けて、「オリジナル・フランチェスコ」を希求するのがフランチェスコ学者たちである。その一人であるダララン氏は、極めて高度な歴史家のアトリエを、パワーポイントの機能を駆使して垣間見させてくれた。

講義の最後にダララン氏に対し、招聘者である佐藤彰一教授から、4回の講義に対する感謝のことばが贈られた。その後、ダララン氏の滞在先である野依記念学術交流館にて、ダララン氏、グローバル COE 関係者、そして聴講学生たちとの交流会が開かれた。講義においても私的な交流においても、常に周囲への配慮を忘れぬ紳士であった。

テクスト布置解釈学各論

各論Ⅳ 思想・哲学テクスト

クレール・フォヴェルグ●「『百科全書』項目「自然法」の読解」

ディドロの思想における自然法は一番多くの解釈を現れ出させた『百科全書』の項目に基づいて検討した。その項目は「政治的権威」項目（1751）と「自然法」項目（1755）である。

「政治的権威」項目において、ディドロは権威を正統とする条件を定義する。自然の原理と国家の原理に制約された権威は政治権威となる。

「自然法」項目において、自然状態の仮説状況の場合は義務も権利もなく、善も悪もただ獣性の善と悪であるだろうとディドロは述べる。衡平そのものも、「政治的権威」項目で定義されたように、正統なる権威に因らなければ真実にならないだろう。したがって自然法は人間を一番代表する原理すなわち一般意志に基づくのである。

一方、『百科全書』においてディドロに定義された自然法の原理と『国際法』（1693）においてライプニッツに定義された自然法の原理の、両者の共通点を検討した。道徳と自然の同等は善良な人にしか現存しないとライプニッツは述べる。したがって、ライプニッツは権利を道徳的な権能として定義し、義務を道徳的必然として定義する。以上のようにライプニッツに記述された自然法の原理は、『百科全書』の「ライプニッツ主義あるいはライプニッツ哲学」項目（1765）においてディドロによってフランス語に翻訳された。

各論Ⅵ 言語テクスト

天野政千代／ゼーン・ゴーベル● 本講座では、テクスト布置の解釈学的研究から得られる知見を、国際的な状況における英語による研究発表へと応用した。とりわけ、大学院生がテクスト間のいくつかの関係を理解する手助けをする一方で、彼らにそれらの理解を自らの研究の準備と口頭発表を通して応用する機会を与えた。授業では2つの主要なテクスト間関係を検討した。一つは、学生自身の学問的背景からくる前テクスト（つまり自らが専攻する分野における理論や方法論に関する知識）とメタ・テクスト（つまり、研究上の疑問への適用を介した、それら前テクストに対する自らの解釈）の間の関係である。もう一つは、これらのメタ・テクストがパラ・テクストあるいはジャンルとして表現され得る方法に関するものである。例えば、パラ・テクストは要約、研究報告書、雑誌論文、学術書、学会発表等の形を取り得る。学生は次に解釈学的テクスト布置に関する理解を、自らの分野における研究上の基礎（つまり前テクスト）を検討することで応用した。この過程を経ることは、学生が学問的な知識の基礎にある隙間を見つけ出す助けとなった一方で、そのような知識の基礎の解釈にも寄与した。手短に言えば、学生が次いで2つの異なる種類のパラ・テクスト――例えば、自らの現在の研究計画の要約や口頭発表――として再文脈化したメタ・テクストを形成することである。

各論Ⅶ 歴史テクスト（集中）

古尾谷知浩●「古代荘園史料の諸問題」

この講義は、弘仁9年3月27日「酒人内親王家施入状」（東南院文書）を素材とし、そこに載せられている美濃国厚見荘（後の茜部荘）・越前国（後の加賀国）横江荘に関わる資料を分析することを目的とした。

10月3日の講義では、厚見荘・茜部荘の沿革を整理し、その起源についての言説の変化を追った。東大寺領厚見荘（茜部荘）は、弘仁9年（818）に酒人内親王が東大寺に施入したことを起源とするが、遅くとも11世紀半ばには、同じ美濃国大井荘と並んで、茜部荘も8世紀の聖武天皇による勅施入であると主張されるようになり、12世紀前半には再び本来の酒人内親王施入説が登場する。この変化を、訴訟に関連する文書目録と照合しながら分析した。

10月17日の講義では、横江荘関連遺跡（横江荘遺跡・上荒屋遺跡）の変遷を整理し、木簡などの出土文字資料について検討。地子米付札木簡、出挙関係帳簿木簡、種籾付札などの木簡を取り上げ、周辺に居住する農民の労働力を動員して行われた農業経営の実態を分析した。

10月24・25日には、横江荘遺跡（松任市）・上荒屋遺跡（金沢市）の現地を踏査。宅地や工業団地の開発の中でかろうじて保存・整備された遺跡の現状を確認し、また、関連施設で出土遺物などを調査した。

グローバル COE 講演会

ジャック・ダララン博士
元テクスト史研究所（IRHT）所長
フランス国立科学研究センター主任研究員

第1回 歴史史料としてのバイユーの綴れ織り

2008年11月5日㈬
18時―19時30分

現在バイユー市立博物館に収められている「バイユー・タペストリー」は、11世紀西ヨーロッパの刺繍技術を知るための貴重な現物であるのみならず、ノルマンディ公ギヨーム、のちのウィリアム征服王による1066年のイングランド征服（ノルマン・コンクェスト）を理解するために不可欠のビジュアル史料でもある。一部欠損しているにもかかわらず、その長さは70メートルに達している。

このタペストリーをめぐっては、これまでも数多くの碩学（たとえばF. ステントン、F. M. ウィルソン、L. ミュッセ）が精緻な注釈を執筆し、幾度にもわたるシンポジウムが開催されてきた。ダララン氏は、そのような過去の成果を十分に吸収した上で、名古屋大学グローバル COE プログラムに相応しい観点から、このビジュアル史料解読の作法を披露した。講演の内容は、1「作品、トピック、歴史」、2「タペストリーの意味」、3「タペストリーが教えること」の三部からなる。パワーポイントを用いながら、タペストリーの描写内容、素材や外形、その伝来過程といった基礎的情報を提示しながら、しだいにテクスト論的理解へと聴衆を誘いこんだ。

講演の白眉は、タペストリーを、ホメロスの英雄物語の影響を受けた作品ではないかと論じた箇所であった。もちろん初期中世西洋において、ホメロスのギリシア語写本が伝来していたわけではないが、ラテン語訳を通じて彼による英雄物語の記憶は連綿と受け継がれていた。ある研究者は、タペストリーに描かれるギヨームの船名 Mora は、ギリシア語の moira（運命）の変形ではないかと示唆している。運命に抗いながら栄光をつかむ英雄物語というモチーフは、本来ギリシアのものではあるが、それがローマ世界を経て、初期中世西洋でも変容したかたちで受容されていた、と示唆する。タペストリーの物語解釈においても、初期中世西洋とギリシア世界との関係においても、刺激にみちた講演であった。

第2回 アッシジの聖フランチェスコと聖クララの関係に見る男／女関係

2008年11月27日㈭
14時30分―16時

ひと月にわたるダララン氏のグローバル COE プログラムでの講演・講義の最後となる本講演では、これまでのように映像資料は用いず、準備されたテクストに解説を加えるかたちですすめられた。

ダララン氏の研究経歴から明らかなように、彼は中世霊性テクストのテクスト学的研究を専門にすると同時に、修道世界におけるジェンダーやセクシュアリティの問題に深い関心を寄せている。通俗的な理解では女人禁制の世界と想像されがちである修道世界においても、女性の果たす役割やジェンダーイメージの理解が極めて重要であったことが最近とみに明らかとされつつある。その牽引者となっているのが、衝撃作『母としてのキリスト』の著者であるプリンストン高等研究院教授キャロライン・バイナムである。ダララン氏の研究も、バイナムのそれに多くを負っていることは言を俟たない。

講演では、アッシジのフランチェスコとクララという二人のフランシスコ修道会創設メンバーにまつわる文献史料を精査し、それぞれが異性に抱いていたイメージを記した箇所、さらには、それぞれが異性として表象された箇所の分析を試みた。知識の乏しい私にはいささか難解な議論ではあったが、ダララン氏の理解に通底する一点のみを強調しておきたい。それは、中世テクストに見られるジェンダー・セクシュアリティ表象は、必ずしも現実世界のそれを反映しているわけではなく、聖書テクスト、騎士イデオロギー、宮廷文化といった、ある特定の価値体系に見られる人間関係や性差に基づいていたという点である。こうした構造主義的理解に従うならば、修道テクストだけではなく、中世文学も含めた西洋中世世界のテクストのいずれも、そうした価値体系の理解なくしては、正確に情報を汲み取ることが不可能となる。そういった点では、極めて射程の広い議論であったように思われる。

ダララン氏の一連の講演と講義は、西洋中世のテクストに基づいてはいるが、すべての時代と地域の歴史テクストに応用可能な解読技術の披露であった。名古屋大学グローバル COE のために原稿を準備し熱意ある教育をほどこしてくれたダララン氏には、感謝の意を表したい。

小澤 実（グローバル COE 研究教育員・西洋史学）

オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムでは21世紀COEプログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバルCOEが名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバルCOEオフィスで、「テクスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当者の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2008年7月以降に開催した4回の要旨を紹介します。

第10回　日本語形式名詞の文法変化 ――「ほか」を一例に――

2008年7月16日(水) 18時―19時

宮地朝子 准教授（文学研究科・日本語学）

日本語の名詞ホカは（1)「そと」意（葦垣のほか）に始まり現代までに以下の用法を獲得している。(2)概念的範囲外（ほかから来た／思いのほか)、(3)範囲外の要素（ほかの散ったあと咲いた桜)、(4)累加（山田のほかに鈴木が来た)、(5)除外（山田のほか学生は来なかった)、(6)シカ的限定（100円ほかない＝シカ、近畿方言等)。

(2)―(5)はホカの抽象化による用法獲得と説明できる。(1)における名詞ソトとの交替を受け、名詞一般に生じる比喩的な意味拡張による(2)(3)の確立、［指示詞＋ホカ］句での使用によって進行した抽象化により、ホカは中世末までに修飾部xを必須とし「［xのホカ］のX」の形で範疇的意味〈範囲〉において事物Xの値（断片）を指示する形式的な値名詞となった。値名詞は名詞として格や述語に立ち［名詞の名詞］構造の前項・後項に立つ一方、遊離数量詞と並行に項名詞の連体修飾と述語の連用修飾を同時に果たし（破産のほかの方法は～＝方法は破産のほか～)、主名詞Xなしで Xの断片を指示する（［三人］が～／［破産のほか］は～)。(3)(4)(5)は値名詞としての特質の発現である。(6)は名詞を脱する用法だが、(5)のホカ句が否定の作用域「外」の再分析を受けて確立したと考えられる。当該の統語的位置は助詞シカ・ハ・モ句に同じである。

名詞一般に生じる現象、値名詞の特性、否定文による再分析による説明はダケ・ホド・カギリなど助詞とされる名詞由来語にも援用可能であると考える。

第11回　メロヴィング朝の国王証書の伝来状況をめぐって

2008年9月17日(水) 18時―19時

加納 修 准教授（文学研究科・西洋史学）

メロヴィング朝フランク時代（481–751年）の国王証書は、偽文書を除くと80点弱しか残っていない。これらの文書の伝来の仕方から、いかなる文書が伝来しやすく、逆にいかなる文書が失われやすいかを探った。

一般に、西洋中世の証書は教会や修道院から伝わり、永続的な法効力を有するために保管されてきた。それゆえ、一時的な効力しか持たない文書や、俗人を受給者とする文書の伝来の可能性は低い。メロヴィング朝の国王証書に関してもこの指摘が当てはまるが、独自の伝来状況もみられる。

伝来の仕方は原本か写しかの2通りに分けられる。原本38点はすべてサン・ドニ修道院に伝わる。そのうちパピルスに書かれた13点の文書は、11世紀にこの修道院がパリ司教座から独立していたことを証明する偽文書を作成するために利用されたおかげで、今日まで残っている。文書の内容ではなく、パピルスという古い素材が重視されたのであった。パピルス文書の内容としては、とりわけ私法行為確認文書の多さが注目される。

写しの場合、単独の写し、証書集など別の史料類型を通して伝わる文書、近代の学者による写しの3種類に分けられる。写しでも、文書の種類によって伝来の仕方が異なる。特に注目すべきは、近代の学者によって作成された写しのうち、特権状は失われた証書集に基づくのに対して、プラキタ（判決文書）の多くが失われた原本に基づく事実である。しかもプラキタは、19点のうち16点が原本で伝わっている。さらにプラキタの中には、裁判形式を借りて私法行為を確認する文書も5点含まれている。

プラキタや私法行為を確認する文書は、永続的な法的効力を有すると考えられているし、俗人のみが受給者となったわけではない。にもかかわらず、ほぼすべて原本か原本にもとづく近代の写しで伝わっているのであり、伝来の可能性がきわめて低いこと、しかし実際には数多く発給されたことを推測できる。

第12回 ディドロと18世紀における解釈

2008年10月15日(水) 18時—19時

クレール・フォヴェルグ 外国人教師（文学研究科・フランス文学）

18世紀においてディドロとダランベールが編集した『百科全書』は、知識の提示を目的としていた。『百科全書』は、歴史を材料にして、自然界を構成する存在のつながり（連結）と人間に作用する事物のつながりを示す。また、そのことによって知識の体系そのものにおけるつながりを示している。つまり観念に関する自然の秩序を想定することにより、観念の秩序に準拠した解釈が結果としてもたらす知識を提示するのである。『百科全書』における解釈の定義によると、思考の作用自体が解釈であるとも言える。特に事実からは確認することのできない体系的な知識の場合、解釈はその体系特有の象徴と概念に思考の自然の秩序を与える。こうして『百科全書』が行った解釈の結果、知識の歴史と進歩が正確に評価されることになる。一方、知識がバラバラの形で存在する18世紀の思想状況から見れば、『百科全書』による解釈は、知識のつながりを認識させるという特徴もある。ディドロの著書である『自然の解釈に関する思索』によれば、自然学に限らず自然という概念が係わっているどんな学問に対しても自然の解釈が応用できる。現世界を解き明かそうとすることは、自然を模倣したプロセスに従って現象と現象が含む可能性の連続性を確認した上、自然の法則を推測することなのだ。すなわち解釈による可能性を、来るべき世界を含めて、推測することなのである。ライプニッツとディドロの哲学においては、それぞれ、知覚も知覚から得た知識も象徴による知識である。知覚は記号による連結を作り出すのである。ところが、その知識は記号化によっても概念化によっても完全に分析できない知識である。そのため知識は解釈を必要とする。ディドロと18世紀における解釈は、自然現象と知識の象徴の間の類似を一切想定しないという特徴があるからである。

第13回 なぜ私たちはみなフローベール研究者なのか？

2008年11月12日(水) 18時—19時

イヴァン・ルクレール 教授（ルアン大学）

フローベール研究の第一人者イヴァン・ルクレール教授（ルアン大学）の講演は、必ずしもフローベール研究者ではない者も含めて、私たちが多かれ少なかれフローベール的なものを持っていることを明快に説かれた。フローベールは、経済的に恵まれていたこともあって、ジャーナリズムとは無関係に、もっぱら書くという営みに専念することができた。彼は写真や自伝を拒み、メディアには登場しようとはしなかったが、これは作家は自分の考えを作品のなかで直接語るべきではないとする彼の「没人称」の美学とも深く関わっている。「クロワッセの隠者」と呼ばれたように社会とつねに距離を保っていたフローベールは、逆説的だが、つねに読者の同時代人であり続けてきた。19世紀にはロマン主義、自然主義、象徴主義などの流派と関連づけられ、20世紀に入ってからは、プルーストやサルトルによって注目され、あるいはヌーヴォー・ロマンの先駆者と見なされるに至った。とりわけインターネットの時代になってからは、フローベールの厖大な量の草稿の、加筆や削除を復元した生成批評版の公刊が電子テクストによって可能となり、ルアン大学のフローベールセンターのサイト上では『ボヴァリー夫人』の全草稿の生成批評版が公開されている。こうしてフローベールは21世紀においても私たちの同時代人であり続けている。その意味では、私たちは意図せずしてすでにフローベール的なのではないだろうか。

東京方面からもフローベール研究者が何人も駆けつけ、熱気に包まれた講演会となったことを書き添えておきたい。

松澤和宏（研究サブリーダー・フランス文学）

グローバル COE 研究員 ブリーフィング ③

グローバル COE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテクスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバルCOEオフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

杉山奈生子●ピュグマリオン効果 ── 生きているかのような彫像の歩み、18世紀フランスを中心に

発表者は21世紀 COE プログラムおよびグローバル COE プログラムにおいて一貫して、18世紀フランスの画家アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画に関する考察を行ってきた（Cf.SITES, 3–1,4–1; HERSETEC,1–1）。雅な紳士淑女が庭園に憩い恋愛に興ずる模様を描いたヴァトーの雅宴画には、生きているかのような裸婦の彫像が度々登場する。この生々しい彫刻表現の視覚的着想源として、描かれた彫像を生身の人間に変容させる「ピュグマリオン効果」を鑑賞用に意図した古代彫刻版画集（Galleria Giustiniana, 1640, etc.）を、形態的な類似性（Jan de Bischop, Signorum veterum icones, no. 76, 1669）も含めて提示してきた。この名称の由来となったピュグマリオン神話は、ヴァトーの生きた18世紀に爆発的な人気を博し、これを主題とした作品が諸芸術分野で制作された。この現象を、ヴァトーの彫刻モティーフを解釈するひとつの重要なコンテクストとして位置づけ考察する。

小澤 実●ハーラル青歯王によるイェリング・モニュメントの形成 ── そのテクストとコンテクスト

本発表は、ハーラル青歯王（d.987）によるイェリング・モニュメントの形成プロセスとその社会的機能を、そこに見られるルーンテクストとそのコンテクストに注目することによる解明を目的としている。発表者は昨年の論文で、(1) テクストの差異化、(2) 石碑それ自体の差異化、(3) 設置空間の差異化、(4) 社会コンテクストの変化という四つのフェーズに分割して、ルーン石碑を分析することを提唱した。今回はイェリングにある、ゴームによる小石碑とハーラルによる大石碑の二つの石碑を中核とするモニュメントにこの手法を適用した。興味深い事実としてわかったことは、ゴームとハーラルはいずれも「王」であるにもかかわらず、それぞれの建立した石碑の様相は全く異なる。それはおそらく両者がもっていた権力の差の反映であり、ゴームからハーラルへと王権が継承される間には、現在理解されている以上に大きな溝があったことが予想される。

谷部真吾●祭りの統合機能に関する覚書 ── 遠州「森の祭り」の戦中期を事例として

1998年に九州大学で開かれた第6回「宗教と社会」学会において、「都市祭礼研究の課題と可能性」と題されたワークショップが行われた。このワークショップの中で問題設定を行った竹沢尚一郎によると、祭礼研究は過去の呪縛を引きずっており、その一つは祭礼の集団的沸騰が成員に共同性をもたらすというデュルケムの宗教社会学であるという（竹沢尚一郎1999「問題設定」『宗教と社会』別冊 pp.81–82）。確かに、竹沢が指摘するとおり、これまでの日本の祭り研究を概観してみると、参加者たちの葛藤や対抗関係の背後に共同性を認めている論考の多いことに気づかされる。しかし、本当に、そうした予定調和的な理解でよいのだろうか。本発表では、以上のような問題意識から、静岡県周智郡森町にて行われる「森の祭り」において、1939～40年（昭和14～15）に起こった騒動を事例として取り上げ、デュルケム理論への問題提起を試みた。

品川大輔●ルヴ語（Bantu, E61）における *-ag-a の分岐仮説

アリストテレスにおける energeia/entelexeia vs. dynamis の対置を引くまでもなく、未来概念が、actual であるところの現在および過去概念に対して認識論的に異質であることは言を俟たない。このことは、通言語的な未来表示の多様性、あるいは通時的な流動性といった事実（Bybee 1991, Dahl 1985）と無関係ではありえない。本報告では、タンザニア北東部に話されるバンツー系の少数民族語であるルヴ語（Bantu, E61）における未来時制（以下 FUT）表示形式の成立過程に関して、i）FUT-Aa [A＝high toned a] および習慣相（HAB）-aA がともに本来的には HAB を表示していたとされる祖形 *-aga から分岐的に派生された形式であること、ii）分岐のプロセスにおいて、形式レベルでは静態動詞活用の HAB への類推的適用、概念レベルでは「予言的（predictive）性質」を介在した HAB から FUT への概念拡張が、背景的要因として機能していたとする仮説を提示した。

海外出張報告

パリ東大学への招聘 …… 松澤和宏

6月9日より約1ヶ月ほどパリ東大学にて招聘教授として、フローベールを中心としたフランス文学の講演講義を行った。フランス語でフランス文学のテクスト解釈をフランス人に教授することは、日本語で話す時には味わえない緊張を覚えるものである。テクストが文字通り対話の場であり、読み手が自らの文化的コンテクストを背負っていることを実感できたことは、貴重な収穫であった。パリ東大学では、名古屋大学との全学交流協定に向けた意見交流を事務の責任者と行った。来年3月にパリ東大学と名古屋大学のグローバル COE との共催による「知のテクスト化」と題する国際シンポジウムを予定している。また6月16・17日の2日間にわたってベルギーのナミュール大学主催「価値の言語学―新ソシュール言語学のプログラム」と題する国際シンポジウムに参加して、ソシュールにおける価値体系と時間性をめぐる研究発表を行った。昨年ジュネーヴ大学で催された大規模な国際シンポジウム「ソシュール革命」以降、ソシュールの草稿研究の気運がようやく高まってきたと言えよう。

（研究担当サブリーダー・フランス文学）

プラハ・ロンドン・フランクフルトでの研究打ち合わせと調査 …… 高橋 亨

9月3日夜に、フランクフルト経由でプラハ空港に到着した。空港にカレル大学日本語・日本文学講座のマルチン・ティララ講師夫妻の出迎えを受け、旧市街のホテルに向かった。プラハには、カレル大学客員教授として、2004年から5年にかけて4か月ほど滞在したことがある。今回は、来年夏に予定しているグローバル COE の国際研究集会の打ち合わせが主目的である。

翌日にホテルのすぐ近くにあるなつかしいカレル大学の東アジア部門の研究室で、江戸時代の思想史を専門とするヤン・シーコラ氏ら3名と、国際会議の打ち合わせを行った。そこでは、以下のような内容について、仮の合意に至った。

- 名古屋大学グローバル COE とカレル大学共催の国際研究集会とする。
- テーマ：テクスト解釈学とその教育―日本の文学と歴史を中心に（仮）
- 日時：2009年9月3日㈭、4日㈮、5日㈯が好ましい。
  6日㈰にエクスカーションも考える。
- プラハ国立美術館東洋部門の日本コレクションの展示も検討する。
- 研究発表を中心に2日間、3日目は大学院生なども参加できるシンポジウムがよい。
- 場所：カレル大学本部ないし哲学部（教養部）。
- 使用言語は日本語と英語。
- 発表者の原稿はあらかじめ資料集として印刷し、事前に配布したい。
- 会議後の報告集は、日本語と英語で併載することが望ましい。
- 宿舎は、カレル大学のゲストハウスないしチェコ文部省ゲストハウスの利用を検討する。また、学生寮の使用も可能。

郊外からの移転途中で、プラハ国立美術館の東洋部門における調査の余裕はなかったが、近・現代美術館で最新の図録を入手した。

6日からのロンドンでは、大英博物館と大英図書館で、江戸時代の『源氏物語画帖』3種類を中心とする調査を行った。ほとんど未紹介の貴重本や、未整理の日本関係資料がまだまだ埋もれているという印象が強かった。

9日にフランクフルトに移り、実用工芸美術館で、やはり江戸時代の物語絵の調査を行った。ことに、『源氏・狭衣歌合』の絵巻断簡は、日本においても未知の新資料であった。この調査には、ハイデルブルグ大学の教員と大学院生、ベルリン自由大学からの参加者もいて、研究情報の交換と交流も有意義であった。思いがけずに資料の撮影を許されたものもあり、各地の美術館や博物館の重い図録を荷物として、予想以上の成果を得た旅であった。（9月3日～12日）

（推進担当者・日本文学）

フランス学士院図書館でのバルザック『セザール・ビロトー』作品生成資料調査 …… 鎌田隆行

9月1日から14日までフランス・パリに滞在し、フランス学士院図書館ロヴァンジュール文庫にてバルザック『セザール・ビロトー』の生成資料の調査を行った。本作品は草稿と校正刷りがほぼ完全に保存され、千ページ以上にのぼる巨大な資料体を構成しており、昨年来、調査を継続しているところである。今回は作中で主人公の香水商ビロトーが執筆したとされる広告文の生成の問題に特化して関係資料の整理・解読を行った。このパッセージは草稿から校了まで14段階の修正過程が確認できるが、こうした修正は登場人物の設定に関わる内容の大きな変化を惹起しているのであり、小説全体の包括的なプランから始めるのではなく具体的な細部の着想から作品を構築していくバルザック特有の執筆方法を証している。研究の成果については HERSETEC などの場で公開していく予定である。

他方、パリ滞在の機会を利用して国際バルザック研究会（GIRB）のニコル・モゼ（パリ第7大）、エリック・ボルダス（リヨン高等師範学校）、ジャック＝ダヴィッド・エブギー（ナンシー第2大）、およびバルザック研究会（GEB）のナタリー・プレイス（ランス大）、ミシェル・リシュレ（パリ第4大）の各氏と会い、情報や意見の交換を行うことができた。最新のバルザック関係の話題としては、『ル・モンド』紙が販促企画の一環としてガルニエ書店との提携のもとに『人間喜劇』を刊行することになり、フランスの主要なバルザック研究者がその編纂を担当したことである。作者バルザック自身が意図した『人間喜劇』全体の作品配列とは異なる独自の構成を持つこの版本については稿を改めて論じてみたい。

（推進担当者・フランス文学）

ジェームス・クック大学を中心とする研究・教育活動報告 …… ゼーン・ゴーベル

はじめに、私が客員研究員としてオーストラリア、タウンズヴィルのジェームズ・クック大学（JCU）人文・社会学部に招聘されるに際し、ご助力下さったグローバル COE プログラムおよび文学研究科のメンバーに感謝申し上げたい。今回の訪問は、8月5日のオーストラリア到着の少し後から、2008年9月28日㈰の帰国までの間であった。滞在の間、私は3つの主要な活動に携わった。その一つは、自らの研究について人類学の学生たちに講義することである。講義の題目は「インドネシア都市部の過渡的背景の下での共同体の形成」であった。活動の2つめは、自著の第6章の完成であり、作業は上述の講義を行う中で、また JCU 図書館の特に移住者の人類学についての文献を利用することで進捗した。第6章が書き上がったため、7章に取り組み始めたところである。3つめの仕事は、COE 研究集会『テクスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る』のプロシーディングズの編集である。この編集作業は、マイケル・オトゥール教授（マードック大学）、重見晋也准教授、および宋蔚氏と協同で行われた。既に9篇の論文の編集が終わり、目下、残り4篇の論文の最終稿と、天野教授と親交のあったオーストラリアの研究者たちからの追悼文を待つところで、あと数週のうちに全てが手元に集まるかと思う。JCU で過ごした間、私は週一度の学部職員会と研究計画セミナーにも定期的に出席した。運営の仕事を引き受け、自らの科研費による研究計画を分析したことに加え、私はオーストラリア国立の諮問委員会のメンバーとなって、オーストラリア政府後援の地域大学インドネシア語新構想（RUILI）の一部として発展した新たなインドネシア語カリキュラムの評価を行うよう依頼された。（推進担当者・言語学）

台湾・清華大学訪問 …… 重見晋也

台湾国立清華大学からの訪問団が今年7月にグローバル COE 拠点に来訪し懇談の機会を持ったことは、GCOE NEWSLETTER No.3にて既に報告済みだが、それ以降も継続的に同大学の人文社会学院と本学文学研究科との学術交流について、グローバル COE プログラムを中心に話し合いを重ねてきた。11月に入ってからは人文社会学院を訪問するための日程調整を行い、佐藤彰一教授（拠点リーダー）、釘貫亨教授（教育担当サブリーダー）、重見の3名からなる訪問団を結成し、2008年12月4日から6日までの日程で人文社会学院を訪れ、今後の学術交流協定について協議を行うと共に親交を深めた。

訪問初日には、清華大学国際交流担当理事である王偉中教授による歓迎レセプションが開催され、人文社会学院院長である張維安教授のほか6名の教員が参加する中、5ヶ月ぶりの再会を祝した。翌日は王教授から大学の紹介を受けた後、人文社会学院の張旺山副教授および黄文宏副教授から大学における人文社会学院の位置づけや教育システムについて説明があり、名古屋大学の教育体制についても改めて説明し意見交換を行った。この会談の中で、研究大学としての質を確保するためにも継続的な国際交流活動が重要であることを参加者全員で確認した。

その後、場所を清華大学中央図書館に移し、中央図書館館長兼全学教養教育責任者である謝小芩教授から学内に複数配置されている図書館についての説明を受け、昼食会では教養教育や蔵書の整備体制について意見を交換した。さらに午後からは人文社会学院に場所を移し、今回の訪問の目的であった博士後期課程の学生を中心とした交流協定について協議すると共に、グローバル COE の取り組みについての紹介を行った。人文社会学院からは、前述の3名に加えて、李貞徳教授（歴史研究所所長）、張月琴教授（言語学研究所所長）、陳祥水教授、于治中副教授、王惠珍助理教授、鐘月岑助理教授が参加し、台湾の人文科学系分野における研究と教育の現状と日本での状況について活発な意見交換を行った。議題は、博士後期課程の教育課程制度から個々の専門分野における研究の現状にいたるまで多岐にわたるものであったが、参加者一同早期に両機関で学術交流協定を締結し、継続的な学術交流を推進することで意見が一致した。

会議後に案内された人文社会学院付属の図書館では、その蔵書の充実ぶりに圧倒された。特に同図書館には清朝期に出されたすべての四庫全書が収められており、学生交流が実現することで名古屋大学の学生にも大きな恩恵がもたらされることを確信するに至った。

2泊3日と大変短い訪問ではあったものの、清華大学における人文学研究の質の高さを再確認し、現在協議中の学術交流協定の締結にも弾みをつけることができた点で、大変充実した訪問だったといえる。（技術統括責任者・電子テクスト学）

外国人招聘研究者紹介

ジャック・ダララン博士
（招聘期間：2008年11月3日〜28日）
1952年にパリ郊外のブーローニュ=ビヤンクールに生まれる。
1972年パリ第1大学で歴史学の学士号を取得し、1975年教授資格試験に合格。
1984年ロベール・ダルブリッセルの聖人伝写本の研究でパリ第1大学から第3期課程博士号を取得。この博士論文は翌年『不可能な聖性——フォントヴロー修道院創建者ロベール・ダルブリッセル（1045年頃–1116年）の見いだされた伝記』と題して出版され、国際的な反響を呼んだ。
その後、在ローマ・フランス学院中世史部門主任を経て、1998年から2004年までテクスト史研究所（IRHT）の所長を務め、現在フランス国立科学研究センター主任研究員として活躍している。また学界や政府関連の要職を数多く担い、フランス中世史学界を代表する戦後世代の一人である。著書、論文は240点の多数を数える。
ダララン博士には本拠点において、4回の講義と2回の講演会をお願いした。

講　義　第1回●「グレゴリウス改革期における
ロベール・ダルブリッセルと修道女の生活」
第2回●「アベラールとエロイーズ往復書簡についての考察」
第3回●「アッシジの聖フランチェスコの
自筆にもとづく母性統治についての考察」
第4回●「ウンブリア伝説：アッシジの聖フランチェスコ新伝説」

講演会　第1回●「歴史史料としてのバイユーの綴れ織り」
第2回●「アッシジの聖フランチェスコと
聖クララの関係に見る男／女関係」

講義と講演会の内容については、本ニューズレターで紹介していますので、詳しくは掲載記事もご覧ください。

大学院生海外派遣事業について

平成20年度 第2回大学院生海外派遣事業の選考結果
選考の結果、下記の2名の採用が決定しました。

- **笠井俊和**（西洋史学）
  ［派遣先：イギリス・国立公文書館］
  「17・18世紀における北米植民地の船乗りと西インド貿易
  ——海事局船舶簿から探る貿易と密貿易——」
- **福岡麻子**（ドイツ文学）
  ［派遣先：オーストリア・ウィーン大学］
  「エルフリーデ・イェリネク初期作品における言語の複数性の意義」

グローバルCOE論文賞（第2回）の募集について

2008年度第2回グローバル COE 論文賞の応募期間は2009年2月19日〜2月27日です。
詳細については2009年1月中旬に Web に掲載するとともに1月配信予定のメール版 Newsletter でも発表する予定です。応募をお待ちしています。

テクスト布置解釈学原論の開講について

2008年度博士後期課程入学者からグローバル COE 授業科目「テクスト布置解釈学原論」および「テクスト布置解釈学各論」の履修が必修化されたことはご存知の通りです。「テクスト布置解釈学原論」については、前期には30回以上の不定期開講、後期には集中講義の形式での開講になりました。来年度については、前期が木曜6限開講となり、後期は2008年度と同様に集中講義での開講になる予定です。

グローバル COE プログラムの刊行物

グローバルCOEプログラムでは、定期刊行物として研究論集『HERSETEC』を発行するとともに、国際研究集会の開催ごとにプロシーディングを刊行し、研究成果の発信に努めています。

2008年12月までに、第1回から第4回までの国際研究集会のプロシーディングが制作されました。ご希望の方には事務局にて配布しています。

国際研究集会の開催予定

2008年度は2008年7月19日から3日間の日程で第4回国際研究集会『日本における宗教テクストの諸位相と統辞法』を開催しましたが、2008年度末にむけてさらに2回の国際研究集会の開催を予定しています。第5回国際研究集会は、フランス文学を中心とした文学テクストを題材に、フランス国内から研究者を招いて、2009年3月5日〜7日の日程でパリ東大学にて開催されます。この国際研究集会は、名古屋大学とパリ東大学との間に締結される学術交流協定の記念事業となっています。また第6回国際研究集会は、歴史テクストを題材にヨーロッパから中世史研究者を招聘して、2009年3月7日〜8日の日程で東京国際フォーラムにて開催されます。国際研究集会も名古屋を離れてグローバルに展開することになりますが、皆様の参加を歓迎いたします。

SITES II HERSETEC
国立大学法人 名古屋大学 グローバルCOEプログラム
テクスト布置の解釈学的研究と教育 No.4
発行日　2009年1月15日
発　行　名古屋大学大学院文学研究科

名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOE事務室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-747-6450
名古屋大学大学院文学研究科グローバルCOEオフィス
〒450-0001 名古屋市中村区那古野一丁目47番1号 名古屋国際センタービル15F
TEL 052-587-1710 FAX 052-587-1709
web ● www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp　e-mail ● bureau@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp